

「誰も寝てはならぬ」(オペラ「トゥーランドット」で、主役のカラフ王子が、第3幕の冒頭で歌う有名なオペラアリア)の歌い方

2005年の秋に、藤沢市民会館で、4日間にわたって上演されたオペラ「トゥーランドット」(ベリオ版の日本初演)。私は、当時、日本音楽界のトップにいらした畑中良輔先生の御指名で、主役のカラフ王子を歌い演じることになりましたが、私以外は、二期会のスター歌手ばかりが歌い演じ、舞台装置にも8千万円をかけたという誠に豪華なオペラでした。このホームページの「CD/DVDのご案内」のお知らせに、「トゥーランドット」DVDのご案内が掲載されていますし、そのご案内のすぐ下に、以下の検索が出来るようになっています。

オペラ「トゥーランドット」のDVDより一部抜粋

第1幕の冒頭部分

第3幕の「誰も寝てはならぬ」

同歌劇 舞台写真集

オペラ「トゥーランドット」のまさに最注目点と言っても過言ではない、第3幕の冒頭に、カラフ王子が歌うアリア「誰も寝てはならぬ」は、トリノの冬季オリンピックで、荒川静香さんが「トゥーランドット」の曲でフィギュアスケートを演じられて優勝なさったこともあり、「誰も寝てはならぬ」の一部が、テレビでの様々なコマーシャルのバックミュージックとしても良く耳にするほど有名になりました。

さて、藤沢でのオペラ「トゥーランドット」は、4日間の公演が行われ、主役級の配役は、二人の二期会のトップ歌手が、2日ずつ歌い演じるということになり、主役のカラフ王子につきましては、二期会のトップテノールの方(敢えてお名前は申しません)が2日間、私が2日間歌い演じました。

結論から申し上げますと、私の方が、二期会のトップテノールの方よりも遥かに出来栄が良く、藤沢でのオペラ「トゥーランドット」の後、東京方面の音楽関連の方々にお目にかかる機会がある場合には、必ず、「あの藤沢の「トゥーランドット」でカラフ王子を歌われた米澤さんですよ！」とおっしゃって頂きました。

私の方が、二期会のトップテノールの方よりも遥かに出来栄が良かったということの最大の原因は、「トゥーランドット」の中で最も有名なオペラアリアの「誰も寝てはならぬ」の歌い方の差にあります。

特に、「誰も寝てはならぬ」の最後の「Vincero! (ヴィンチェーロ) “われ勝てり!”」の歌い方に、私と、二期会のトップテノールの方とでは大きな違いがあり、楽譜からしても、“ヴィンチェー・・・”よりも長く“ロ・・・”と伸ばすべきで、その方がずっと格好が良いのです。私は、「誰も寝てはならぬ」の最後の「Vincero! (ヴィンチェーロ)」を歌います場合には、最も聴かせどころである曲での最高音の「H」の“ヴィンチェー・・・”を4秒、それに続く「A」の“ロ・・・”を5～6秒伸ばしています。

一方、二期会のトップテノールの方は、最後の「Vincero！（ヴィンチェーロ）」が、” ヴィンチェー・・・“はある程度伸ばせても、それに続く” ロ” が、喉が詰まったようになって、一瞬で詰まって終わってしまうのです。その方は、NHK のニューイヤークンサートでも、何度も、この「誰も寝てはならぬ」を歌われたことがあります。必ず、” ヴィンチェー・・・ロツ” と” ロ” が一瞬で詰まって終わってしまっていました。はっきり申し上げて、その二期会のトップテノールの方の発声がベルカントでないで、喉が詰まってしまい、” ロツ” 以上伸ばせないし、伸ばすと、声がひっくり返ったり、かすれてしまうのが分かっているで、彼は、” ロツ” 以上伸ばさないで、す・・・いや、伸ばせないのです。

二期会でも、藤沢での「トゥーランドット」では、” 二期会のトップテノールの方より、米澤さんの方がはるかに良かった” という評判が流れて、私の耳にも達しました。「トゥーランドット」の「ペリオ版」の日本初演（世界でも、ミラノ・スカラ座について2 番目）の公演であったこともあり、藤沢での「トゥーランドット」は、クラシックファンの中では、伝説となっているとのことで、今でも、東京方面に行った時に音楽関連の方々にお会いすると、「ああ、あの藤沢でのカラフの米澤さん」と声をかけられることが良くあります。

(2022 年 3 月 26 日 記)